

⑤ 1550 年のこと

239年4月~5月土曜

⑤ 1252 P

ようこそ 2269/85

1.515^P

主から ④ 1393 全比
帰還 516 秋 50
51
④ 1393 999

下向 685P
変貌 2006

供奉 640⁰ 高等地口國10
地名 382⁰
11林598⁰ 內3993 (親不知)

改行

伊都国 背振山脈の西端が断崖となつて海に迫り、
 輸海へ玄海（波濤が間断なく打ち寄せる所）
 そのへ狭隘な道を行く難升米（中臣）らの
 もとに、次から次へと大勢の人々がやつてき
 て、今はもう大変な行列に変貌していった
 色鮮やかな旌旗が吹き靡き、警固・儀仗の大列
 は、拳げて喜びの声に満ち満ちていた。
 大夫難升米および次使都市牛利が大任を果
 して帰還したというだけで、魏国の天子の
 子の名代である建中校尉梯儂らが、この倭国
 へはるばる下向してきたのである。
 この度の朝貢が、魏国に快く受け入れら
 れたことは、誰の目にも明らかだった。
 難升米らの晴れやかな快挙を祝うために、馳
 せ来る者達は、
 丁よくぞ、遠い異国から御戻りなさいまし
 たし
 「昨年の丁度今ごろ、この伊都国を後に立
 れてからというものの、何時、お帰りになるのや
 らと案じておりました」
 突然の嵐にもよくぞ御無事

Handwritten: 22221

$$15/6^P - 1/5$$

二六〇七
四〇五 773
七六 713

1928

と、口々に言ひ、そして又、
 一、邪馬都国の都では、我等が
 常にお安否を氣遣つておいでのよう
 にお見受けさ
 れましたか、貴方様の御元氣な様子を御覽に
 なら小ましたら、必ずや、震しくもこの上も
 なく、御心を安んじらるゝとでしよう

と
言
つ
て
、
皆
が
皆
、
我
が
事
の
よ
う
に
喜
び
を

その歓呼の渦は、刻々と大きくなり、華々

人の列は海沿いの険阻な曲りぬて続く細道を
 伊都国の国衙の方へ遅々とした歩み

ではあったか
道んでいった。
行別がずいぶん
長くなった。
たのた

賓客 きやく はある様倭 やまと
 からは倭人 やまとじん 達の たち 歡迎 えんげい の の 様子 ようす
 異国 いこく の の なに なに げ げ ない風習 ふうしゅう の の 一 ひと

17. 11. 2006

同又 ④ $2754 \frac{2}{4}$ 次 11 斤 11 斤

つ一つが、
梯子には、物珍しく思われるのだ。

1	2
---	---

米

やがて、平野部へ出た。第の因余島地方へ参照
 颯颯と行列がっらなる。稀集らに乗せた
 幡旗はためく中を行く御輿は精兵に前後
 を護られ、その威風は道を掃い、美々、さは
 たとえようもない。

こうして、
梯儼ら、
前原あ経て加布里あ

たりへと到った。
 以下、
 第 四 系 島 地 方
 参照

ま ま ー う

北方から来た人々をやる、一面に広がって

い
る
海原（糸島水道）の向こうに聳える秀麗

な山
可也山
と筑紫富士
ともいう三六五

の山196の麓3の水際2に、
向とも巨大な
下
底

叢を誇示しているかのような大鳥居が見えた

なお、
往古の
当時の
地形は、
現在と
は大きく

異なっている
博多湾の西端が唐津湾に通じる

島根半島の図
① 152^p-32
② 172^p-2/23 約2300年前の糸島の地形

図② 2754^p-5/6 (第345回)と同

1,516^p-4/5

③ 944^p-4/7 の
図面を採用すること。

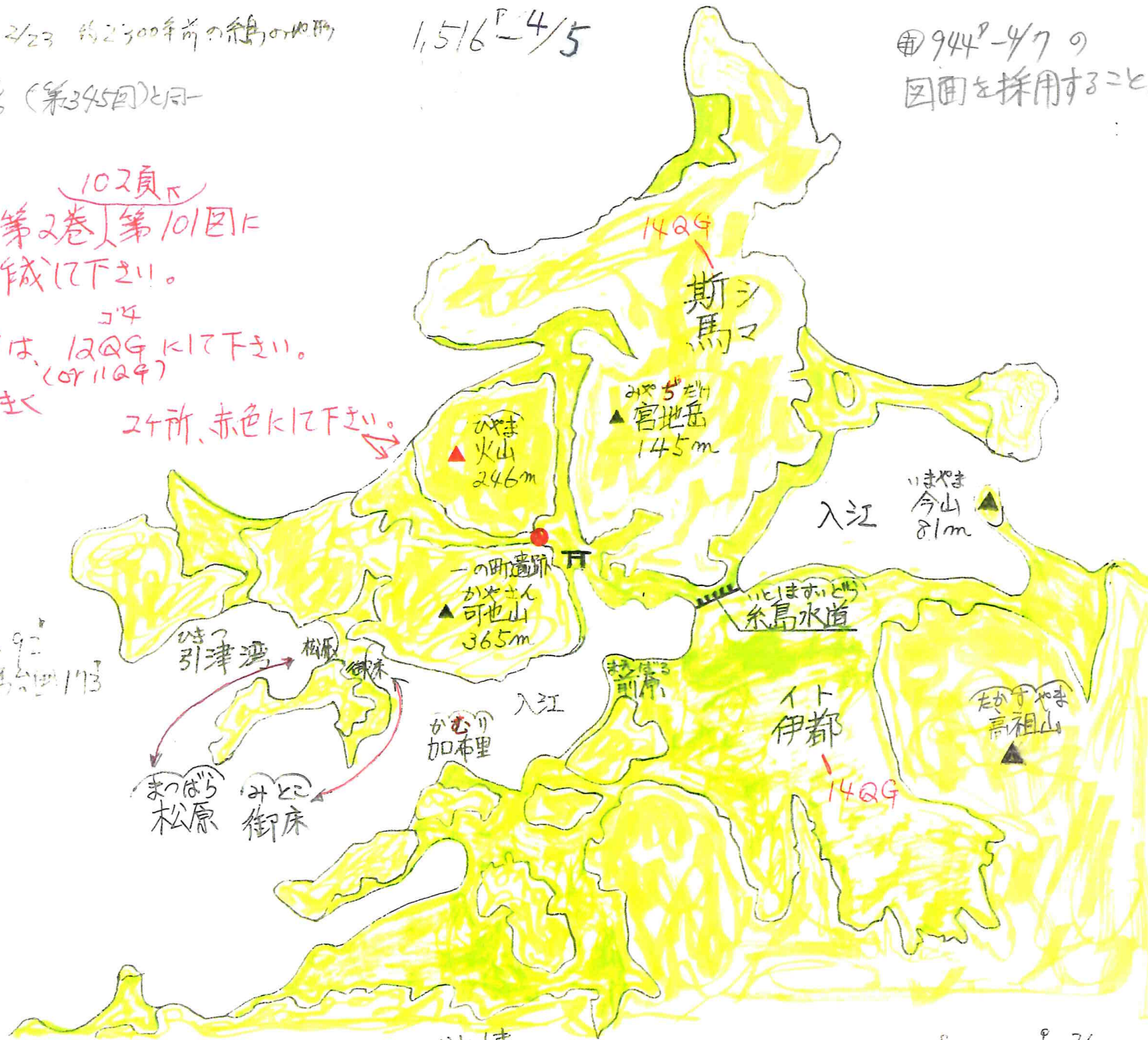
・カラー
・『新・お物語』第2巻 第101図に
準じ、図面を作成して下さい。

④ 14QG以外の字は、12QGにして下さい。
13QG (or 11QG)

・右頁の上半分に大きく
掲載下さい。

2ヶ所、赤色にして下さい。

糸島 新・お物語 第2巻 第101図
まじり糸島 173



糸島市
④ 772^p-2/23
④ 772^p-5/23

← 高祖山を
追加したい。

13QG
④ 14QG — 第266図 糸島地方 (想像図)
『伊都町遺跡ガイドブック』糸島新聞社、平成13年4月発行 6^p/168頁、第101図参照

1516 P-5/5

・カラー

・右左
カットしないで
下さい。

・左頁上半分に
大きく掲載。



142G

写真図版 235

加布里湾越しに可也山を望む

132G

四むですむ1517*1057

『福岡県の山』山と溪谷社、2008年8月5日(初版第4刷)発行、60頁参照。

1517¹ - 1/2

- ・ カラー
- ・ 上下左右とも、
カットしないで下さい。

- ・ 右頁上半分に
大きく掲載。



14Q9

写真図版 236

まえはる

かやさん

前原市北新地から見た可也山 (山頂がとがって見える)

13Q9

『福岡県の山』山と溪谷社、2008年8月5日(初版第4刷)発行、60頁参照。

12Q9

おうじ さいう

- ・ 往時の水路は、もっと広がったようである。(第266図参照)

↑
前前頁

- ・左頁上半分に掲載
- ・左右もカットはない。
下まじい。
- ・上下は、カット可。
- ・枠不要。



ひやま ほうくく
火山の北麓には、
「大館戸」「小館戸」
などの地名が有る。
(^{くめのみ}来目皇子遺跡説明板
参照。)

館戸、お境613P

1429

1209

1309

松山崎 順子さん 平成25年6月撮影

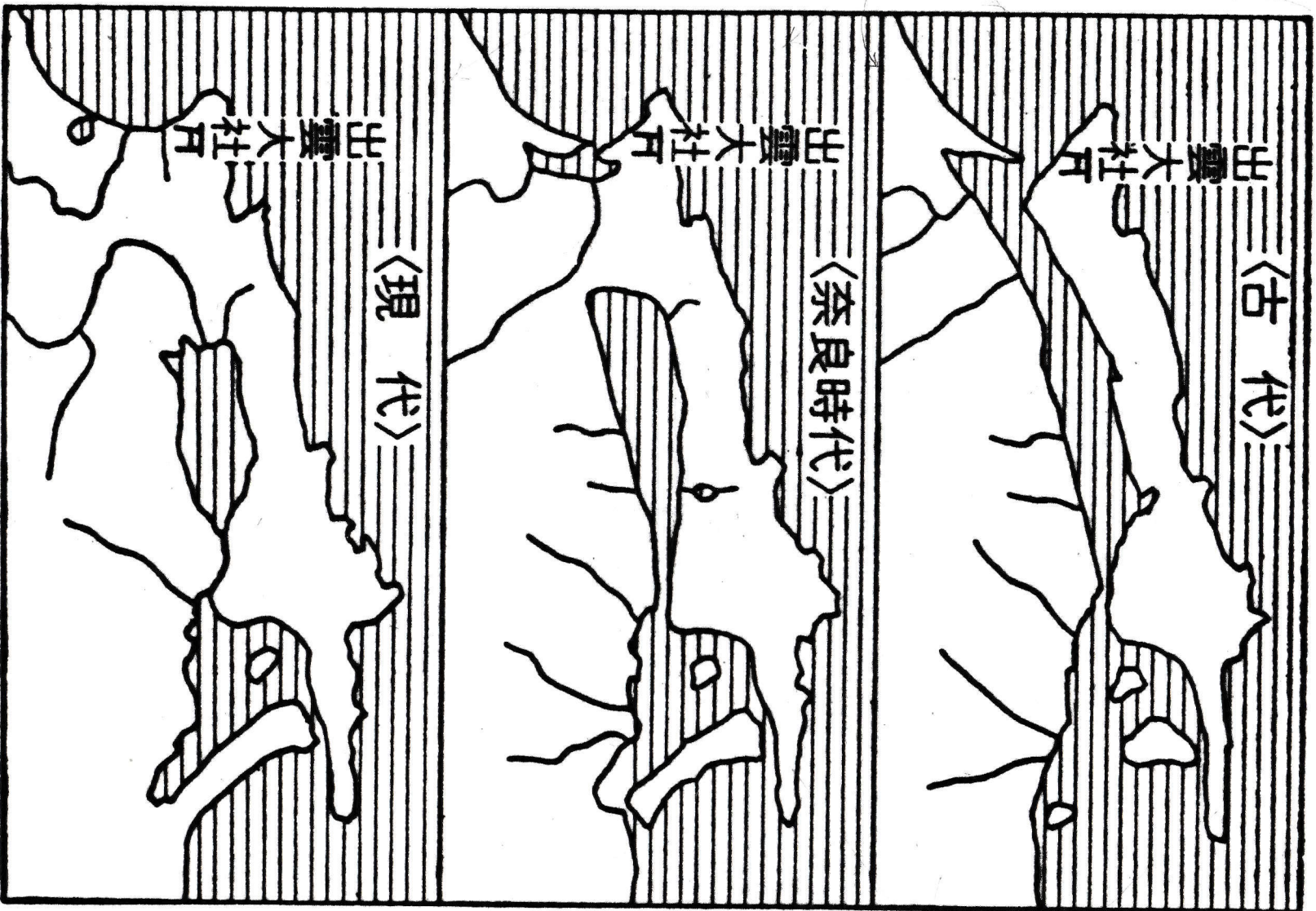
写真図版 237 ひやま 246m (糸島市役所志摩庁舎仲丘から、西北方の火山を望む)

おほくぬのみにと、あせん、あた、すまの、をの、み、に、り、ち、だ、り、そ、う、あ、
・大國主命の祖先に当る素戔鳴尊(一太率日主)は、出雲大社の地形によく似ている所(可也山曰火山曰
宮地岳の山裾が寄り集まっている地点)あたりに住んでいたのではなかろうか。
火山の伝説上については、第12章「火山」の項において述べた通りである。(第5巻)64頁
⑦3 ⑦944P-3/4 火山

・右図の上左側に、
左に示した山を掲載。

糸島半島の図
由 944P-4/7
由 1516P-3/5

1,518 P-1/5 (2754-3/6 と同じ)



(第5巻) 65頁

★343 図と図

第267図 伊勢川河道の変更と井ノ口湖の形成図

1304

出雲大社 千家尊統 学生社 平成元年9月20日 重刊発行 37頁参照

同図④ 2786^{P-3/6}

1518^{P-2/1}

1518^{P-2/5}

赤い△印
にしたい。

- ・カラー
- ・写真撮影して
下さい。
（原簿一冊は付いて
左頁の上半分に大きく
掲載したい。）

ミの範囲の
ヨコレも
とっておいで
下さい。



糸島半島の用
④ 2786^{P-3/5}の表

- ・小野小町 61^P
- ・邪馬台国の「路陽城」
- ・糸島半島 ④ 1518^{P-3/6}
- ・" 再校2巻98頁

ゴ4
14QG

第239図 出雲大社周辺地図

ゴ4
13QG — ※ 昭和52年3月30日付、国土地理院発行の25,000分の一地図「大社」参照

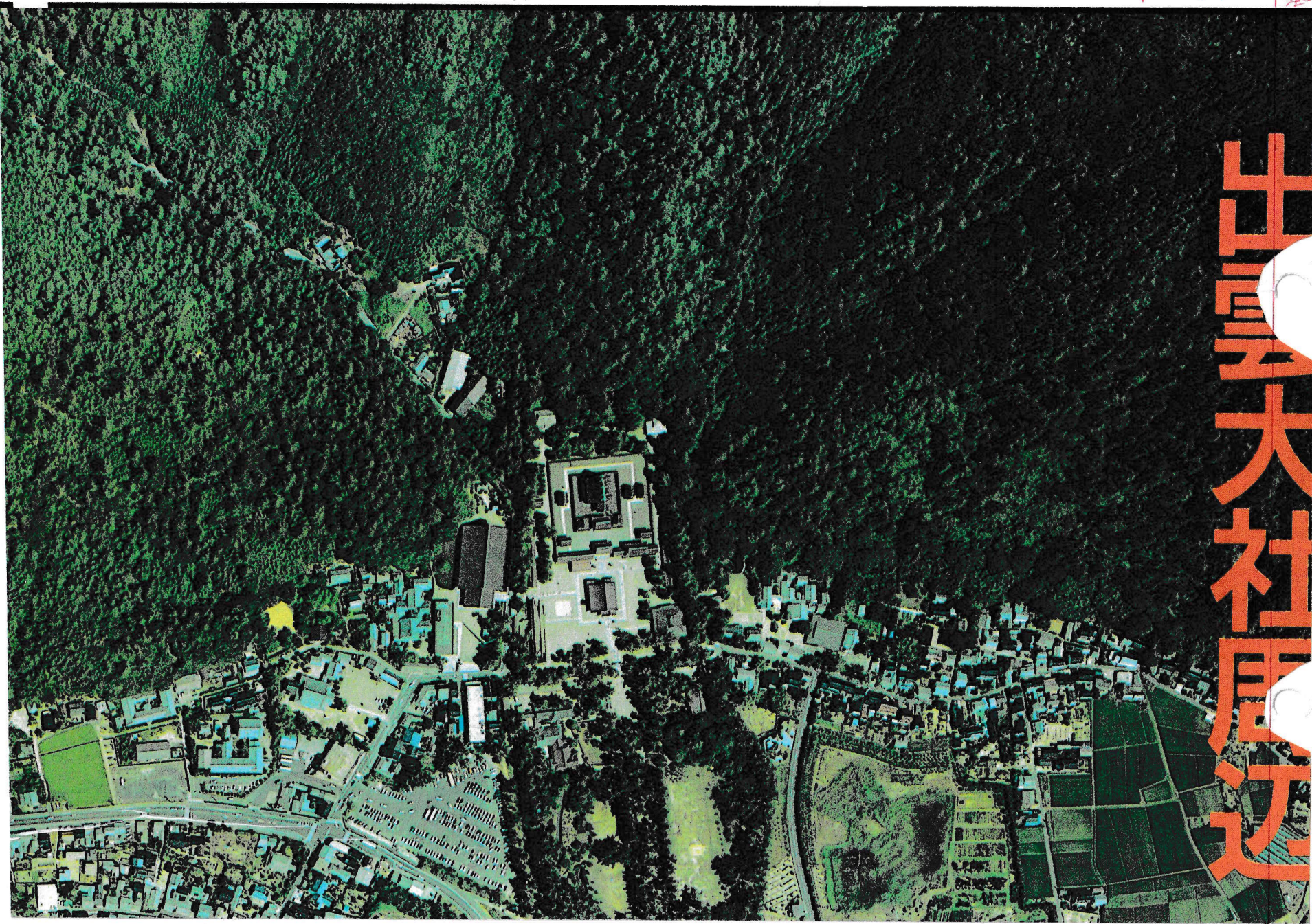
75. 奥谷あたりが、『一の町遺跡』に相当するようである。（第5巻） 66

カッ

1,518^P - 3/5

→カッ

- ・カラー
- ・左頁の下半分に大きく掲載下さい。



出雲大社周辺

76

1309

1409 写真図版 238 出雲大社 周辺

(第5巻)

→カッ

『出雲』毎日グラフ別冊「古代史を歩く」毎日新聞社、昭和61年11月1日発行、8頁参照。

67^P

同図 ②445^P-2769^P-4/5 1,518^P-4/5 4

カラー

右頁の上半分に
掲載下さい。

一の所蔵館



②1527^P-5/5

77

1309

(②2769^P-4/6と②1409)

1409

第268図

江戸時代の出雲大社絵図〔杵築大社近郷絵図〕(17世紀、北島家)

『出雲大社展』島根県立古代出雲歴史博物館、平成25年4月12日発行、81、92、239頁参照、(第5巻)68

同一⑤ 2775^p-3/4

1,518^p-5/5

・カラー
・大きく掲載に
下さい。
(右頁の下半分)



出雲大社 千家
151頁にも写真。解説有?

74/④
弥 八雲立つ 八重
敷の多いと。幾重にも重
なる 来ハの字もある

1429 写真 473と
同ー

写真図版 239

出雲大社の背後にそびえる八雲山

1329

『出雲大社』神社紀行(1) 学習研究社、2002年11月7日発行、17頁参照。

1229

やくもやま

やまどの

みめやま

きんぞく

禁足地

(第5巻)

78

・八雲山は、大和国の三輪山と同じく、禁足地とされている。
・あるいはその昔、八雲山の山頂から、黒煙が立ち上っていたのかも知れない。

69^p

1518. 鶴ヶ山 1519^P - 4/4

・左頁上半分に
掲載す。
・上下はカット可。



79
1399

1499 写真図版 240 ²⁴¹⁰ 引津湾からみた可也山(365m) ^{かやさん} ^{加高得 479^P} ^{1517. 16⁹⁷} ^{しま} (第5巻)
『甦る古代の国際交流都市』 ^{引津湾と御朱松原遺跡} 平成13年度秋季特別展、志摩町歴史資料館、11頁参照。 70^P

1519^P-2/4

⑦

万④-8
班3

ひきつ
引津の

集
L
(四) 日本
古典文学大系
、
岩波書店、
八一
？

八三頁 第 266 回 糸島地方 参照

(1) 鳥 (走麻郡) の西端に位置する 引津の

茨は、
島
(島根半島)
の西端に位置

する
する
コ
伊
耶
佐
の
小
浜
凸
凹
五十
狭
狭
の
小
河
に

ちり
そうとう

地理的に相当するといえよう

(2) そ
ー
て、
これ
ら
七
首
の
う
ち、
次
の
三
つ
の
歌

は
一
大率
日
須佐之男命
（素戔鳴

（尊）
か^やで伊都国の可也^{かた}山^{かま}の山^い辺^まへ山^しのほと

り)に館を構えていた往時を偲んで作られ

たのてあろうと考へてみた。

草枕
旅
を
苦
み
戀
ひ
居
れ
ば

可也の山辺に
草男鹿鳴くも

12.5
大意
旅の苦しさ、故郷を恋しく思っ

て
い
る
と、
可也かやの山ヤマ辺へに男鹿オノカが鳴なく。
そ
水みづを

こ

用法の例
用いてある例
2274

万④-81 P 3993
-63 注4

1,519^P-3/4
万④-83^P

万④-83^P

聞くと、恋一さがまさることよ。(万巻十五

一三六七四 第 269 回 八牡鹿啼く参照)

●なお、草男鹿(原又、草乎思香)の草は、

用例が少く、万巻十四一三五三〇、十五一三

六七四、十五一三六七八に三例があるだけの

仮名である。

●草は広韻、采老切、tsall の音。日本語の

サ(ツア)に用いられた。

●この歌の作者大判官の壬生使主宇太磨は、

但馬守等を歴任した、という。あるいは人故

郷とは、但馬国を指しているのだろうか)

又妹を思ひ眠の寝らえぬに秋の野に

草男鹿鹿鳴きつ妻思ひかぬて

●(大意)妹を思つて、寝られずにいると、

秋の野に男鹿が鳴いた。妻を思う心に堪えか

ねて。(万巻十五一三六七八)

③夜を長み眠の寝らえぬにあひひきの

山彦郷音め 日佐男鹿鹿鳴くも

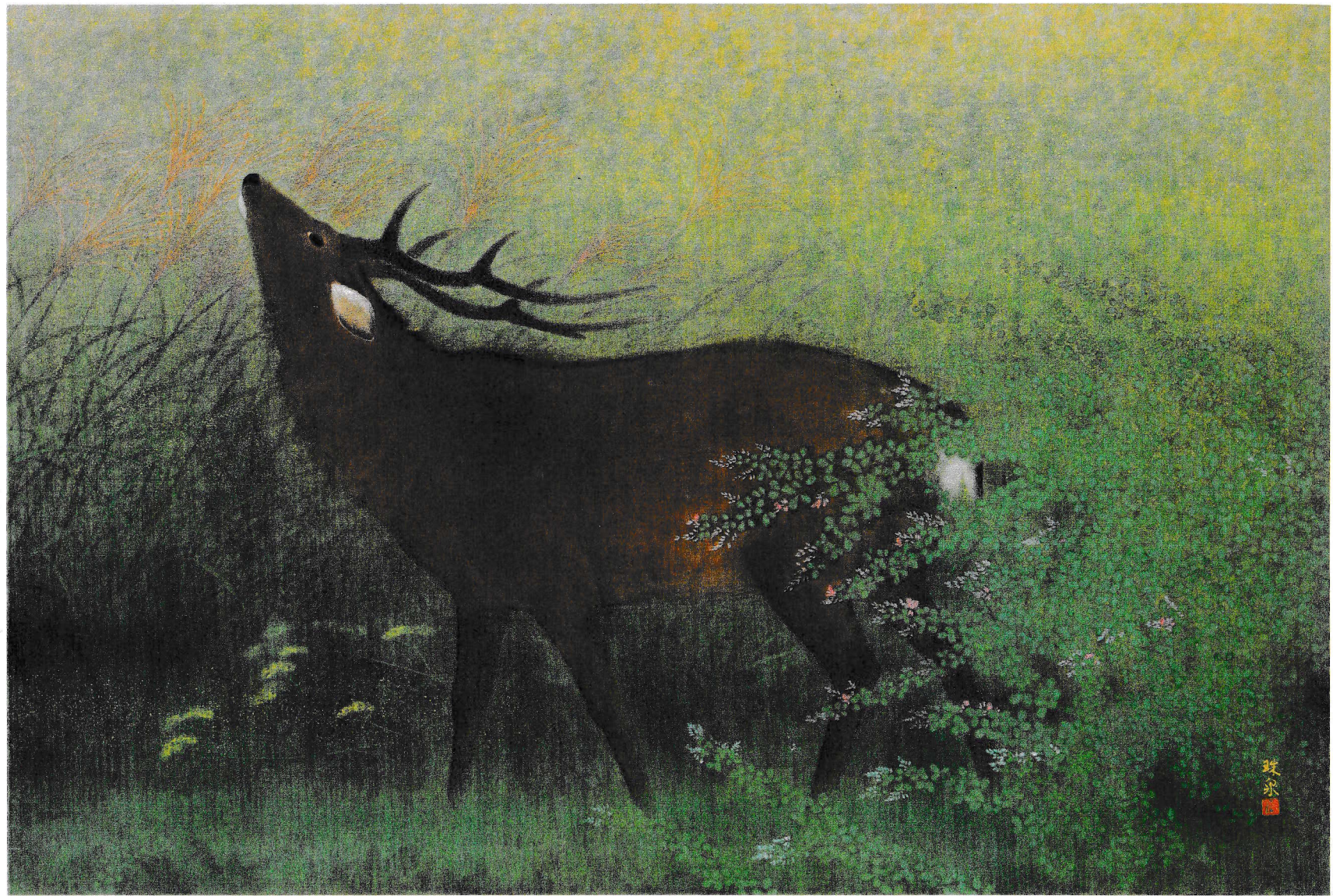
●(大意)秋の夜が長いので寝られずにいる

折から、山彦をひびかせて男鹿が鳴くことだ

(万巻十五一三六八〇)

1.519² 4/4

- ・カラー
- ・右頁の
上半分に
大きく
掲載
下さい。



1209 (今井珠泉)

④4.545³-³/₂
額田王

1309

1409 第269回

おかしな
牡鹿啼く

『万葉日本画の世界』奈良県立万葉文化館所蔵品図録、奈良県、平成13年9月15日発行、35頁参照、
(第5巻) 73

ここでは、
若草伽藍について、
記さない。

大電に
14年と
ある

728

草薙劍、佐々木という字は、
 素音を表わしているのかも知れない
 また、草薙劍といえは、草薙劍が思ひ起
 される。
 草薙劍は、本来、須佐え男命
 ナギ（蛇）から得た剣し、のこを意味し
 たりたのだらうか、ーーなどと定かならない
 因となから想像される。（「日本書紀」上）日
 本古典文学大系、岩波書店、五六三頁補注一
 一九六参照）

トル

参考次に述べると、可也山西南麓の
 御床で王莽の貨泉が出土した
 という。（第一回御床参照）
 貨泉というのは、前漢を亡ぼして新
 という国を建てた王莽が、天鳳元年（西暦一
 三年）に作らせた鑄造硬貨である。円形方孔

てはなかり
おとす

④ $1519\frac{3}{4}$ 吋

1520^p-2/3

天つき
政行

①1503^p14^頁

かち知れない

とちあ水、糸島半島西岸の沿岸部が
↑↑↑海外貿易の玄関口になっていたのか
も知れないや（第266回参照）
↑↑↑その本末なら、梯嶋等の一行は、
へー支国から一千余里のところにある糸島
半島西岸の浜辺に上陸する予定だった
のではなからうか

*

①1470^p-4/6

①1516^p-4/5

①1470^p-4/6

(第5巻) 75

①516^{P-17} ①517^{P-末}

1.520^{P-3} ①525^{P-1/3}

梯僦は、入江の向こう岸にそそり立つ大きな鳥居を見つめながら言った。
「ほう。あれに見えるのか、伊都国の国府でありますか。————して官の名は何と
いうのでしうかなし
梯僦は、水路のかなたの大きな鳥居の方を
いっとな見つめながら尋ねた。
「かたわらに控える都市牛利は、
「はい、伊都国の官は、曰爾支比と申しま
す
と答えた
（岩波文庫「四三七〇、三九頁、注三、山田博士の説参照」）
曰爾支比とは、曰主比の意であろうか。
そして、これより後のことなから次の
ような経緯を考えてみた。
・伊都国の曰主比であつた須佐え男命は、
やかて故あつて倭国から追放され
母国（近畿地方）の根の国を建国した
（出雲）の根の国を建国した
つまり当初の曰出雲国は、近畿地方に
あつたのであう。（既述）
・ところがその後倭国は、出雲国に対して

新編 89

元上161所 266
1520 266
267

地籍簿 146
記(四)65

1.521

地籍簿 266
1520 266
267

記(四)65 ④1518 2754-44
記(四)65 2753

天孫 記(四)90上
2754 代替(たいかえ)云 132
たいたい云 134

云 638

云 1254

新編
(1)-113 表
(1)-114 表

大に書きある
ハレに1ない方がよい。

日国譲り^{にやがり}を迫^{せま}った。

命^{みこと}やむなく、須佐え男命の六世の孫^{まろ}は、出雲^{おの}国^{くに}(近畿^{きんき}地方)を天孫に譲り渡^{わた}して、代替^{たいかえ}地^ちである現在の島根県東部一帯に、新^{あらた}たな^な出^い雲^{うん}国^{くに}を作った。(第5・6表参照)

とまた、大国主命は、かつての須佐え男命の居所^{きよしょ}の地^ちに似^にて、ところを探^{さが}し、東西に細長い島の西寄りの小丘^{こおかみ}にハ雲山^{やうやま}を創^{つく}建^たした、

と想像^{そうぞう}される。(第266・267・268頁写真版236・237・238・239参照)

なお、御崎山^{みさきやま}・彌山^{やま}・鼻高山^{はなだか}などのある山(一)の別名を、宇賀山^{うかのやま}としようである。

「古事記」新潮日本古典集成、六五頁。名著出版へ出

雲御崎山^{うみさきやま}等参照

すなわち、このような歴史的背景があつたので、遠祖^{ととおつち}。

須佐え男命が日主^{ぬし}と呼ばれていたと、にちなみ、須佐え男命の六世の孫は、日大国主^{ひのくにぬし}と称^{しょう}した。

ように見受けられる。

5表(1)-113
6表(1)-114

鳥

また、更に参考までに述べると、
述のようにな、
へ景行天皇および成務天皇は、
穂宮で天下を治められた。
という。(記・紀)
察するところ、
へ景行天皇および成務天皇は、
島(志賀島)において天下を治められたの
うう。
と思わゆる。(第九章へ志賀の高穴穂宮の
項において既述)
あるいは、こうした先例にならって、
須佐え男命は、海中に浮島に日御所を置
き、海の国(九州北端の地域)を治めたの
かも知れない。
尚、伊都国の一般庶人は、糸島水道の南岸
深江・前原・周船寺にかけての、
住したのであろう。
*
①

想家 1522^P-1/2

H3. 11. 3日
→ 三製電氣監製
H4. 2Aに

1.523^P-1/2

全社に287^P

大森ヨシ
2050^P

えい 小林
3世

都市牛利は、また、こう言った。

「伊都国の副官を、イボコウといひます」

「そこで、梯僦は、副曰泄謨觚」と書きと

った。

「なお、泄謨觚について、内藤博士は

シマコ・セモコ・島子、山田博士はヨイモ

コ・妹子、であるという。

「しかし、この物語では、

「へ泄謨觚（リ泄謨公）は、阿菩大神（リ

土記揖保郡上岡の里条のヨ阿菩大神（リ

一に、出雲国式内社伊佐賀神社の祭神「伊保大

明神」として、いる」と同一人物であろう。

と仮定して話を進めてゆき、

土記「日本古典文学大系、岩波書店、二八七

頁、注二六参照」

「なるほど、確証がないものの、

「伊都国の泄謨觚（泄謨公）は、風土

記「編纂の時、都合上、出雲国

阿菩大神（リ伊保大明神）として記された

のであろう。」

と想察される。（後述）

（阿菩大神仮定→改定版）

H30(2018)3.30(金)~4.4(4回) 今和2(2020)9.20(日)~9.22(4回) 加藤清正 435 日本史辞典 185

1.523^P-2/2

熊本の

社、六頁参照)

熊本県高等学校、社会科研究会、山川出版

ひならわいていこ。(「熊本の歴史散歩」

親しみを入れて。日せいーよこさんと呼

安土桃山江戸初期の加藤清正公の(ことを

五七二頁注ニ「氏姓」参照)

日本書紀(四)日本古典文学大系、岩波書店

氏や地方の豪族に与えられた姓であるという。

尚、公・君・臣は皇室より分れたと称する

かについては、今後の検討を待ちたい

ある日公という称号が、――三世紀初頭

の頃の倭国に引き継がれ採用されていたか否

大明神について追って述べることにしよう

と解釈してみたい。阿菩大神(伊保

容易に結びつけられないうように、日出雲

国の阿菩大神と記されているのであろう

へ魏志倭人伝中の伊都国の「世謨觚」と

伊都国の「阿菩大神」(伊保大明神)とが

すなわち、風土記においては、

1.524^p - 1/2

報 いる云 2146^p 処 思 元 1116^p
その当時の倭国のこと
南の出口あたり

1988-31
159

柄渠觚（日槍）

表

また、都市牛利は、すいぶん奇妙なことを語った。

その昔、柄渠觚（日槍）という新羅の王

子か、倭国へやつてきました。

柄渠觚は、この輸海（玄海灘）の地域を

王化するのに尽力し、奮闘して輝やか

勲をあげました。

そこで、柄渠觚が打ち立てたその大きな功

績に報いるため、倭国の朝廷は、柄渠

觚の子孫達を、世々王と厚く処遇して

いるのです。伊都国の

柄渠觚の子孫たちは、倭国の風習に従って

代々日天日槍と称し、伊都国内の東

の方、あそくに一際抜人出て見えるあの山

（今の高祖山）の麓に城を築いて、あたり一

帯を治めております。

世々王となった伊都国の柄渠觚たちは、子子

統主は ①1528^{P-1/3} 1,524^{P-2/2}

思い乱れた
思い込んだ。

こと

夫つき
改行

孫孫、皆々女王国に統属してきたのでした
というのである。

何の^{えん}とやらさっぱり要領を得ない説明に
梯儼は困惑した。

へ「王」というからにはこの伊都国の官
である爾支（主）よりも強い権力を持ってい
るのだろうか✓

なにと取り留めもなく考えあぐねるのだった
梯儼は

*

複数の官達の名が、
 魏志倭人伝の後文において、
 邪馬台国の

$$1.525^P - 1/2$$

欽定四庫全書 92^P

$\frac{2}{11} \cdot 1528 = 272$
 $\frac{2}{11} \cdot 1536 = 279$

親友 79 P

一大^年⑦1529 序文

往來	觚	到	こ	田
常	有	伊	こ	こ
所	千	都	の	と
駐	餘	國	と	こ
	戸	宮	ろ	ろ
	世	曰	魏	魏
	有	爾	志	倭
	王	支	人	伝
	皆	副	曰	には
	統	曰	世	謨
	屬	觚	柄	渠
	女	王	國	郡
	使	郡	使	使

と記述されていゝ。
〔岩波文庫〕四三七〇、七九頁参照〕

觚
 柄渠觚、其國王皆属女王也
 到伊都國、戸萬餘、置曰爾支、副曰洩溪
 と記されてゐる。

頁參照

前者（魏志倭人伝）には「千餘戸」とあり、
後者（魏略逸文）には「戸萬餘」とあつて、
前者の「千餘戸」は、
後者の「戸萬餘」に
比して、
約十分の一に過ぎない。
従来から指摘されてゐる通り、
前者の数字に大きな差が見られる。

また、こ
小うの文
をよく注
意してみ
ると、

「世謨觚」
(「世溪觚」
と、「柄渠觚」
との間

に、
「次曰」
の字句が
記され
ておら
ず、大

「
太いコ
子い
な
の936
ハ
お
お

魏志倭人伝の後文において、
邪馬台国の

複数の官達の名が、

やめとのくに
邪馬台国の

4735 欠 695P

4735 欠 1049P

1.525P-2/2

ようた 額 13斤

1421P

「官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、
次曰奴佳鞮」
と、いうふうな順次で次曰曰曰次曰曰と記
載されており、中およむの書き方と明確に
違う。

國として非常に不可解な点がある。

①「到伊都国、官曰爾支、云々」(魏志倭人伝)
と述べているのだから当然、

「倭国の朝廷から」伊都国に派遣されて、官

は、爾支である。

②「世有王、皆統属女王國」(魏志倭人伝)

「其國王皆属女王世」(魏略逸文)
とあって、

「伊都国は独立国であり、世々王が有ると

はいえ、皆、女王國に従属してきた」

と述べている。

「こう」たことを考え合わせると、日魏志

倭人伝に「魏略逸文」の伊都国条は共に、

「何らかの文言が欠落して、いるように思慮

される。

220

574に前記374

1.526^P

おは

太
い
ち
ち

1/10 1/9

と
飯
定
一
た
い
や

*

多分、もとの原本には、
「副曰：洩護舩（洩溪舩）」と、「柄渠舩」
との間に、何らがの語句が記されてゐた。
そので、と想像される。
「伊都国に到った。千余戸有る。」（倭国の朝廷
から）伊都国に派遣されてゐる官を爾支、副官
を洩護舩（洩溪舩）と曰う。
この伊都国には、柄渠舩、日槍（ヒココ）
（ヒココ）ハハクコ、彦子、あるいはヒホコ
が居て、萬余戸有る。世々の王座は、皆女王
国に統属してきた。
と解釈するのが妥当なように思われる。
なお、参考次に述べると、「岩波文庫」四
三七〇、三九頁注四には、「柄渠舩」について、
「ヒココハハクコ」彦子、あるいはヒホコ
日槍（日槍）であろうか。
と記されている。
この物語では、伊都国の柄渠舩
へ、天日槍の直系の子孫が、伊都国の柄渠

719^P

①太公望にも国をさすけ
②阿蘇、菊池、山鹿、上佐に
封じた。
562P
1440P
朝鮮史 321P

朝鮮史
周 321P

1.527P-1/5

秘史 58P

伊都国の中に、柄渠觚（日槍）の国

かつて、桓・靈の頃（一四七〜一八八年頃）

倭国の地は大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年

主無しという状態が続いた。

この「倭国大乱」において、日槍の子孫

は倭国の側につき、大きな武勳をあげたのだ

ろう。そして「倭国大乱」の結果、倭国は、

北九州および山口地方を領有するようになった。

その時、太伯の後と自称する倭人達は、

多量の「倭」の周の時代と全く同じく、

血縁関係を根幹とする「諸侯統治体制」をと

った。『東洋史辞典』東京

創元新社、へ周参照

「かし、それにしても、日伊都国内に、柄渠觚

つ、さ、ぐ、ち、175
屈 かがむ、くぐむ
大カマ 657 邪屈 総傳本見解

由1522-3/2末 手持ちの総大徳院本尾には届
まぼろしの邪屈 173 この語句が無い
同194-3/4 非常に 1527-3/4 今となって

いまさら リョウイキ 今更 149 領域 今更 2324P
一団の指揮に属する区域 表

に統属した^{とうぞく}と推察される。

*

① それでは、

天^{あの}日^ひ槍^{やり}（柄^ひ渠^ま筋^こ）の領地は、この当時、何

と呼ばれていたのであるか、

② そーして又、その地は、伊都国の中において

どのような領域を占めていたのだろうか、

といったことについて考えてみよう。

トル

うまでもなく、そなたは、今更に分る終

うまでもなく、そなたは、今更に分る終

うまでもなく、そなたは、今更に分る終

唐の張楚金の翰苑に、

邪屈^{（屈）}伊都傍^{（伊都）}連斯馬^{（連斯馬）}

とさしてある

邪屈か、伊都の傍らにあって、斯馬に連

らなっている

という意味である。（「まぼろしの邪馬台国

宮崎康平、講談社、一七三頁参照）

などが考えらるようか

天つぎ
改行

① 天^あ日^の槍^ひ (柄^ひ渠^ほ舩^こ) の領^{りやう}域^{いき}は、日^に邪^じ屈^{くつ}屈^{くつ}、あ
るいはそ^それ^れに^に近^{きん}似^しした名^なで呼^よばれ^れて^ていたのか
も知^しれ^れない。^{*} 翰^{かん}苑^{えん}には^に屈^{くつ}と記^きされ^れて^ている。
② ともあれ、その地^ちは^は伊^い都^と国^{こく}の南^{なん}部^ぶ一^{いつ}帯^{たい}に
あ^あつ^つて、^{こう}高^{たか}祖^そ山^{さん}近^{きん}傍^{ぼう}を中^{ちゅう}心^{しん}と^と下^げ
後^{こう}代^{だい}の志^し摩^ま郡^{ぐん}の^{ほう}方^{ほう}へ^へ連^{れん}つ^つな^なつ^つて^ていたのでは
な^なか^かう^うか^かな^などと想^{さう}象^{ざう}さ^され^れる^る。
な^なお、推^す古^こ紀^き十^{じゅう}年^{ねん}四^し月^{げつ}系^{けい}に、^い日^に鳥^{とり}郡^{ぐん}と記^き
さ^され^れて^てお^おり、^{この}日^に鳥^{とり}郡^{ぐん}は、筑^{ちく}前^{ぜん}国^{こく}
志^し摩^ま郡^{ぐん}、今^{いま}の福^{ふく}岡^{おか}県^{けん}系^{けい}島^{しま}郡^{ぐん}北^{きた}半^{はん}のこ^こと^とで^であ^ある
と^とい^いう。[「]日^に本^{ほん}書^{しょ}紀^き」^(下)日^に本^{ほん}古^こ典^{てん}文^{ぶん}学^{がく}大^{だい}系^{けい}
岩^い波^は書^{しょ}店^{てん}、一^{いち}七^{しち}八^{はち}頁^{えい}、注^{しゆ}六^{ろく}。「[「]帝^{てい}国^{こく}地^ち名^な辞^じ典^{てん}」
太^{たい}田^{でん}為^ゐ三^{さん}郎^{らう}」名^な著^{しやく}出^{しゅつ}版^{はん}へ志^し摩^ま郡^{ぐん}参^{さん}照^{しやう}」
と^とす^する^ると^と「[「]一^{いち}大^{だい}率^{そつ}の^の」
へ伊^い都^と国^{こく}の[「]国^{こく}府^ふは^は志^し摩^ま郡^{ぐん}の西^{せい}半^{はん}部^ぶ」[」]に^にあ^あつ^つ
た可^か能^{のう}性^{せい}が^があ^ある^る」
と^とい^いえ^えよ^よう^うで^で「[「]第^{だい}266 回^{かい}へ系^{けい}島^{しま}地^ち方^{ほう}(想^{さう}象^{ざう}図^ず)参^{さん}照^{しやう}」
①

1516
-4/5

⑤ 1534⁰-14✓

经上 260° 前页 68

天つき
改行

想像前頁の町並み 1517^p 1259

$$1527^{\circ} - \frac{5}{5}$$

HIV

図 1. 系島半島の南に位置する高祖山近傍を居所
 とし、天目槍の遙かな子孫等は、
 丹後半島の南に位置する「出石」を給わつて
 住んだ。(重仁紀三年系参照)
 素戔鳴尊の六世の孫である大國主命は、系
 島半島西半部に地形的に相当する「鳥根半島西
 端部」に祀られてゐる。(第266図系島地方、第267図出雲)
 ということなのだらう。
 なお「出雲大社并神郷図模」
 出雲大社并神郷図模
 へ江戸時代の出雲大社絵
 図は、
 へ三つの山塊が、出雲大社の東・西・北に
 聳え立っている。
 様子を示している。
 *現時点では明言出来ないものの、今後、
 へ系島半島西半部の「一の町遺跡」近傍か
 ら、三世紀前半当時の状況を示唆する「遺構・遺
 物等」が多数確認されるのではなからうか。
 と期待される。

大社周辺参照

魏志 38年 476年 1525P

1.528P-1/3

魏志 50,51年

郡侯の往来常に駐まる所

都市牛利は、梯馬が理解かねて首をひねり、
内心、

やきもきし

く、
理解、
て、
欲し、
日槍の国のことを、もつとよ

とい思ゆずに、
お小なかつた。

そこで都市牛利は、梯馬が書きしるし易い

ように、
説明し直した。

支と、
伊都国には千餘の戸数があり、
爾

が置かれています。――そしてこの伊都国内

には、柄渠舩(白槍)という者を統治者とする国が

有るのです。の戸数があります。其の国には絶

えることなく世々王が居り、皆誠意をもって

女王国に統属してゐるのでござりますし

更に、都市牛利は誇らうにこう言

った。

後漢の57年、167年にはまた 倭寇部
傷口が癒は起らない。伊部口は全17戸が全
(147~188年)

387

→ 後漢當時に
「奴国」

Handwritten notes on a lined page, including the word "F" and the word "C".

⑤ 1535^p
 $-1/3 \quad 13^{st}$

大宅 おとす
訪ねる

来玩折 来臨 餘金の190半200
来遊 御趣 149 元 1/5

1,528-3

24

来乙

郡使の方々は、南の奴国への往来の際、必ず
 日槍の国にお立ち寄りになつたもので
 お勧めになつた使者の方も、女王国への往来
 の折には、伊都国の国府ばかりでなく、私の
 国、日槍の国にも訪ねておみえになつたの
 でした。私達はこのようにした来訪を非常に光榮
 なことと喜んでおります。
 郡使として来朝された梯嶋様も、女王国へ
 の往来に當つては、伊都国の国府ばかりでな
 く、是非ともあの柄渠觚（日槍）の王城に御
 来臨下さりまして、御心安く駐まつていただ
 きとう存じます。
 と言つた。
 梯嶋は、
 へ伊都国の国府と、柄渠觚（日槍）の王城
 とが、なぜそんなにもややこしくからず同居
 してゐるのだううか？
 不思議で思ひあへなかつたが、ともあれ有

H30(2018)3.30(第4回)~4.4(4回)
H31(2019)1.1(第1回)~H31.1.2(3回)

1,528^p-3/3

「任務」1531°/分

F 1/2
1/1

るがままを記すのが自らの務めであると思
おし、
説明のとおりに書きとった。

*

1493°